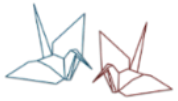


未来に向かって伸びる鶴嶺の子

鶴小だより 冬休み号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和7年12月24日発行



限りある「教育」の時間

僕は、教職に就いて5年目の時、初めて6年生を卒業させました。卒業式に向けて、返事や礼法が上手にできるように、その意味も含めて繰り返し教えました。何度も何度も練習して、子どもたちは少しずつ上手になって立派に卒業していきました。その式の中で、僕はあることを感じました。

式が始まってしまえば、僕は1人1人の子どもに声かけすることは一切できません。あー、証書をもらう手が下がりすぎだと思っても、呼びかけの声もう少し張ってとアドバイスしたくとも、もう子どもたちには何一つ伝えることができませんでした。このように自分がもう手出しできない状況で、子どもを見守ることしかできなくなるという場面を初めて体験し、これが教育することの本質なのだと感じたのです。今まさに、子どもたちは教師の手を離れ、今まで教えたり育てたりしたものを土台にして、それぞれに自分を生きていくのだという必然を感じたのでした。

僕が、昔感じたことを元にして、「教育」の本質をここではっきりさせましょう。1つ目は、子どもたちに関われる時間は、限られているということ。もう1つは、関われなくなったあとは、子ども自身でなんとかしなければならぬということ、この2つです。これは、親御さんであっても逃れられません。順番でいけば、大人の方が先に死ぬからです。このことから明らかになるのは、「僕らは限られた時間で、子どもたちが1人で生きていけるようにしなければならぬ」ということです。

では、僕たちに与えられた時間はどのくらいでしょうか。独り立ちを仮に、成人の18才に置いたとしたら、僕らに与えられた時間は18年間となります。しかし、青年期になると自身の考え方がかなり固まってくることを考えると、幼児期から学童期はとても大事な時期だろうと感じます。思春期真っ只中で、関わりが難しくなる中学3年間を除けば、たった12年間しかありません。

次に、1人で生きていくということについても確認しましょう。もちろん、18才を過ぎててもアドバイスも手出しも全くできなくなるわけではありません。しかし、健全な育ちをしていれば、親との距離は、少しずつ離れていくものです。学童期と同じように口出し手出しができているとすれば、それは逆に心配になってしまいます。僕たちは、子どもたちの心の中に、様々な種を植え、「子どもが主体」として生きていける力を与えておかねばなりません。もっと言えば、ただ生きてさえいれ

ばよいですか。僕は、子どもたちに「幸せ」に生きていって欲しいと強く強く願っています。皆さんも全く同じではないでしょうか。

その次に、「1人で生きていく」と「幸せになる」という2点について、一緒に考えてみましょう。

「1人で生きていく」ときに、1番必要な力は何だと思えますか。細かく挙げていくと様々な力が思い浮かぶと思います。けれどシンプルに考えるとたったひとつの力が挙げられるのです。それは、「自律」の力です。「自律」を辞書で引くと、他からの束縛を受けずに、自分で決めた規則に従うこととあります。この場でも何度も話題にしてきた、まさに、「自分で考え、判断して行動できる力」です。だって、規範は自分の中にあるのです。様々な事について、きちんと向き合い自分で考え判断してこなければ、願ったとて、自分の中の規範は創れないと思いませんか。

それでは「幸せになる」方はどうでしょうか。これを考えるためには、彼らが独り立ちして生きていく社会について考えなければなりません。それは、時代が変われば、必要な力が変化していくからです。時代は先行き不透明。現在、社会の中心となっている世代が、想像し得ない社会の中で子どもたちは生きていかねばならないわけです。そんな社会の中で一番必要になる力は何でしょう。思い当たりますか。そう。そうです。「自分で考え、判断して行動できる力」です。誰も予見できない社会を幸せに生き抜くとき、この力だけが頼りになります。

最後に、この両方を実現するために必要な力として、人とつながる力、相手を受容できる力があると考えています。「1人で生きていく」時に、他者はその支えになります。自分でできない時には、助けてもらえばよいからです。そして、「幸せになる」ためにも、他者と協働するからこそその自己実現の世界があるので、やはり必要不可欠です。他者と上手くつながることは、この2つの実現に大きく関わっていると言えます。

子どもたちを「教育」できる時間には限りがありました。子どもたちをみんなで守り支えられる今を大切にしたいと考えます。この地域のすべての大人が教育の当事者として子どもに関わり、子ども1人1人に伝えるべきことを伝えること、間違いを許しながらしっかり、「自分で考え、判断し行動する」ことを見守ることを続けていきたいと考えます。何故なら、子どもたちを守ってやれなくなってから、1人で学ぶことは難しい、酷なことだと思ってしまうからです。不遜